



小説 瀧澤 春

挿絵 池田靖宏

立ち読み版

第一章	疾風迅雷！	特命警士ジャステイスフォースⅡ	006
第二章	闇の真実！	特命警士ジャステイスフォースⅡの恥辱	054
第三章	悪魔の薬！	狂喜の特命警士ジャステイスフォースⅡ	100
第四章	最悪の結末	ジャステイスフォースの潰え	141
第五章	淫獄の虜囚	ジャステイスフォース	191

登場人物紹介

Characters



あまかわ あきら

天河 洸

警士局特務隊所属の捜査官。特命警士ジャスティスフォースⅡに変身し、犯罪組織と戦う。大ざっぱなところがあるが明るく元気な性格で、誰からも好かれている。

くづき れいの

久月 麗乃

特務隊の特別捜査班を率いる主任捜査官。知的かつクールな印象で、後輩である洸にとっては厳しくも優しい良き上司。

やまが

山賀 ライネ

十代にして大学を卒業し、警士局に配属された若き天才少女。洸を先輩として慕っている。

これが幾多も悪人を成敗してきた戦士の声なのか。

洗はそんな弱々しい声へ力を込め、ライネより身体一つ分前に出た。そして自分の胸に手を当てて叫ぶ。

「するなら、私を！ ……私が、代わりに……受けるから。その娘には手を出さないで」

「……ほおう。お前が俺たちの慰み者を買って出るって訳かあ」

洗は、硬い表情のまま無言で頷いた。

（私さえしつかりしてれば大丈夫。大丈夫、私は正義の味方だもの！ これぐらい乗り越えられなきや。……あの人に笑われるわ）

特命警士はぐっと、両眼に力を込める。

（相手は確かに強いけれど、隙を見せない相手なんていない。見極めるのよ、相手を）

目の前の獣人の腕や脚、息づくごとに上下する胸。全てを捕らえて離さないように視界へと入れる。

（こちらが手の中に落ちたと思えばきつと。……隙を

見せるに違いないわっ）

だがそれはたとえ逆転の機会を狙う為だとはいえ、あまりに壮絶な決意だった。まだ誰にも許していない肉体を、憎むべき組織に奪われてしまいかも知れない。

戦士以前の、女としての恐怖がむくむくとせり上がってくる。

「だめです！ そんな……私の為に先輩だけが汚されるなんて、耐えられない。私も、私も一緒に……！」

声を上げて感情を見せる才媛。しかしその少女を洗は突き放すように、キッと睨んだ。少女は肩をはねさせ、口を噤んだ。するとジャスティスフォースⅡの顔はすぐにいつものように笑顔を孕んだ、温かいものに戻る。

「ライネ。心配しなくても私は大丈夫。……約束して。ライネには指一本触れないって」

「お前が俺たちを満足させられるって言うならな」
ハティは洗々という感じで了承する。だがその眼は

すでに、十代の少女のむっちりとした脂の乗った肉体の検分に入っていた。あまりに粘っこい牡の視線に、洗はプリーツスカートから露わになった股を擦り寄せる。少女にとっては、面と向かって自分の肢体を眺められることだけで緊張してしまう。

「じゃあ、早速やつてもらおうか。正義の味方ちゃん、よろしく頼むぜ。……さあ、もつと明るくしろ、残りの電気全部つけろお!!」

どこかで発電機の動き出す、ウーンという音が聞こえてきた。やがて遠くの方でパツ、パツ、パツと電灯がつき始める音が近づき、やがてこの空間の全てが明らかとなった。天井にぶら下がっている管は天井のほとんどに及んでいる。その一本一本が薄気味悪く、暗闇の中をうねっているようにも見え、目を逸らさざるを得ない。部屋の隅では様々な機械が山と積まれている。機械の稼働音なのかゴォーゴォーと地響きのようで、

なかなか落ち着かない。床はその冷たさから石を磨いてつくられたものかと考えたが、光の反射具合と洗たちの姿を映し出す透明度からして、特殊な素材が使用されているらしい。光の下に晒されて、この空間の異様さがより鮮明になった。

しかし露わになったのは、この部屋の全容だけではなかった。それまで暗かった室内であまり目がいかなかった獣の身体も、光の下に晒されることになるのだ。

「なっ!？」

洗の目に入ってきたのは、ハティの股間部で遅しく盛り上がった肉棒だった。あまりの異形な姿に、洗は顔を背けた。

「それじゃ、その娘は丁重に扱ってやる。安心しろ、お前が頑張れば何もする気はないさ」

自らの陰部が見られているのは分かっているはずなのに、獣人の様子に何ら変化はない。

「え、ええ」

洗は、ハティの姿から目を背ける。

突然目に入ってきた牡のモノに動揺したのを悟られないようにする。何度も約束を違^{たが}えている獣人だが、今はなるべくその神経を逆立てる訳にはいかない。洗の視界の中で黒服戦闘員たちが、ハーフの少女を取り囲む。下手な真似はするなよ——ハティはジャスティスフォースⅡへと暗に言っているのだ。

「おい、さっきから顔を背けているようだが。お前、男のちんぼ、見るの初めてか？」

獣は笑いながら言う。洗は直截的な表現に耳まで赤くした。

「初な女は嫌いじゃない。じゃ、俺のちんぼを舐めてもらおうかつ。しっかり舐めて、綺麗にしろ。お前をこれから散々喜ばせてくれるモノだからな。分かったかつ？」

さらに腰を前へ押し進めてそれを強調してみせる。必死に見ないようにしたにもかかわらず、これでは

牡の象徴が嫌でも目に入ってしまった。ゴクリ……と、改めて目の当たりにした異様ぶりに洗は息を呑んだ。眉が、不安げに心なしか垂れる。そんなついつい弱気になった自分への叱咤の意も含めて、声を張る。

「分かったから、そんなもの近づけないでッ！」

獣の暴虐の塊は、その極太の幹に蚯蚓^{みみず}のような血管を無数に走らせ、まるで第二の口のように大きな鈴口をひくひくとさせていた。さらにその肉兇器は天を突きかばかりに反り返り、肉柱と亀頭傘との段差がかぎ爪のようだ。その赤紫の妖色の膨張亀頭の大きさと、肉竿の長さはキリンの頭と首を連想させるほどに大きく、そして長い。

そのグロテスクな化け物じみたモノを、どうしてそこまで誇らしげに突き出すのか、洗には理解できない。肉竿から漂ってくる排泄物臭さが鼻腔に絡みついていく。臭いだけで犯されてしまいうさだ。

眉間に皺を寄せ、顔一面を嫌悪に顰めた。洗は侮蔑

の表情で突き出された男物を睨めつける。だが一向に洗は動こうとしない。目の前に突き出されても尚、毒々しい色合いの食虫花を思わせる肉棒から顔を背け続ける。目の前の肉筒の前ではどうしても、少女の面が大きく出てしまっていた。ハティの爛眼がゆっくりと細まっていく。

「そうか、正義の味方も所詮は非力な牝。いざ本物を見て、肝を潰したか。別に構わない。お前でなくつても女はもう一人いるんだ。……こいつなら無理矢理口に突っ込んでも十分従順に対処してくれそうだしな」
身体を動かすと、ブルンとその二十センチはあるうかという剛直が震えた。すでにその太い幹沿いは、興奮の液で滑り光る。洗は戦闘で見せた以上の素早い動きで、腰を浮かせた。自分がライネを敵の手から守ると誓ったのだ。

「やるからッ。そんなものを、ライネに見せないでっ」
自分が言ってしまったことの重大さに心臓がバクバ

クと今にも破裂してしまいそうになる。目の前の敵を引き留める為に伸ばした指先も震える始末。

「そんなもの、だとお？」

パシン！ と艶やかな褐色の頬に張り手が飛ぶ。激しい横へのGに洗の身体は、体重がなくなってしまうように、床を数メートル滑って転がった。

「調子に乗るな、女ア！ 貴様は捕虜だ、奴隷だ。生かすも殺すも俺たち次第。……貴様を喜ばしてくれる俺の男根へは、敬意をもっと払うんだなッ」

（ぐ……！ こんな犯罪者にジャスティスフォースⅡが、頭を下げなきやならないなんて）

正義に燃える清らかな魂が傷つく。しかし逆らう訳にはいかない。もう一度あの獣人が臍を曲げることがあれば、きつと迷いもなくライネに奉仕を迫るだろう。

清廉な少女が穢されるのは、自分の身が引き裂かれる以上に辛い。立ち上がりながら、乱れた髪を直す。捲れたスカートから悩ましく飛び出した脚をいそい

そと引つ込める。

「……やります……。やらせて、……ください……お願ひします……っ」

「そうか、よしよし。ならたつぷり舐めてくれよ。待ちきれなくて、ベトベトだあつ」

粘着質の透明な滴が糸を引いてゆっくり垂れ落ちていく。洗は一度大きく息を飲んだ。そしてスカートの短さを忘れたかのように、むっちりとした太股から鼠蹊部まで覗けてしまうほどに膝を立てて跪いた。その格好になると丁度目の前に、肉棒の反り返りがくる。ごくり、と息を飲んだ。洗はすでに、目の前の牡肉棒に圧倒されていた。

異形の者の男性陰部は一切無駄な体毛がない。幼児の腕ぐらひはあろうかという肉筒に、その幹回りよりさらに一回り大きな亀頭、陰部の根本でだらりとぶら下がった女戦士の拳ぐらひの大きさを誇る陰囊。目の前にはそんな異様な光景が広がるばかりだ。

（ふ、ふ太いつ、うう。こ、こんな……モノを、口に入れるの……？）

試しに鼻を近づけてみると、吹きかかってくる生臭い蒸し暑さ。肉塔を覆う^{つた}蔦のような血管はヒクヒクと脈を打ち、新たな液が先端部からゴプリと生ずる。

「どうした、またできませんって言うんじゃないだろうなッ」

男の逸物の後ろ、完全に怯えきつたライネの顔が見えた。

（そうだ。私はあの娘を守らなくちゃいけない！ その為なら、私は……）

支え代わりに硬い肉質に手を軽く添え、おもむろに口を開いて舌を出す。依然として顔中に感じる熱気と尿臭に耐えながら、ついに先っぽに舌を這わせた。

「おお、う、おう……ううッ」

一瞬呼吸ができなくなり、呻きが漏れた。舌先は痛み^{ひしゃ}の合間に痺れを伴い、拉^ひげてしまう。一度怯んだ舌

は、なかなか思うように操ることができない。ビクビクッと獣ペニスが揺れる。洗は過呼吸のように落ち着きなく喉を動かし、瞳を慌ただしく転がす。そしてもう一度、舌を添えて先走りを若干拭い取る。ペチャ……。舌の先端に乗せられた牡の滴が、味覚器官の震えを受けて、プルプルと左右に小さく揺れ動く。

「むぐっ!? ……えっほ、げつつうっつ!」

それは肉棒から発せられる汚臭を何千倍にも凝縮したもののようだ。ジリリと、舌粘膜が容赦なく炙られ、同時にあの悪臭がドッと肺細胞にまで吹き込んでくる。初めて味わった男性器の味は最悪だった。全身が張り、何度もえずいてしまう。

だがここで気持ち悪さに困惑している場合ではない。フェラチオが初めてだろうが何だろうが、満足させなければならぬ。洗は一瞬でも弱気になった自分を忘れる為に、一度思いっきり眼を瞑り、そして見開く。肉塊へと再び、唇を震えさせながら近づける。

まだ生気に満ちた光の宿る眼で相手を睨めつけながら、洗はフェラチオを再開した。

「ひゃ、あぁん……」

舐めるたびにブルブルと暴れる肉勃起には舌を這わせにくい。

「やぁひゅん。むにいひっふっ……クンンオン……っ」
手から零れそうな動きを止める為、やむなく握りを強くすると、五指の間から零れ出そうなほどの肉感と、生命として熱量がドクドクと血管の伸縮と共に伝わってくる。

「最高だぁ、女ア。お前、正義の味方やりながらソープにでも通ってたんじゃないのか。ぐへっへっへッ」
獣には言いたいことを勝手に喋らせておけばいい。しっかりと一本、芯の通った洗の心は、獣の戯言などでは少しも揺るぎはしない。ライネにこんなものを口に含ませさせてはいけない。

(……こんな、やつっ……さっさとイかせてやるわ)

一人妙な感慨に耽りながらも洗は悪臭に耐え、醜悪な先端部分への舌沿わせの範囲を広げていく。絶えず動き続ける蛇のような血管、肉柱に添えた手が、舌先が、このまま吸いついて離れなくなってしまうのではないかと思えるほど、先走りの量は溢れて止まらない。液は粘っこく、濁っている。尿臭さも混じり、潔癖な少女の肉肌を空気に汚す。

「ひいっあん、ムウ……ぐうひいあう。オオウムッ！」
先走りの零れる先端場所を穿るように、口を密着させる。白い歯の間から伸ばした舌でぷっくりと小山状に膨らんだ輪郭をなぞり、女性が憧れるウエストのようにキュッとなったくびれを突つつく。そのたびにグロテスクな赤身からは液体が飛び跳ね、舌愛撫を続ける少女の膨らみの薄い口元を艶々に彩る。洗の鼓動は運動をしたように速くなった。

（熱いのがどんどん零れてくる。ビクビクしてッ。や、身体……私……熱くなってきてる）

少女は何度も喉を鳴らしながら、顔を背けた。こうでもしなければ、その淫靡な輝きと臭いに、自分が魅入られそうな気がしたのだ。だがそうすると今度は、ライネのことが思い出されてしまう。一体彼女はどんなことを思いながら、たとえ自分を守る為だとしてもフェラをしている先輩の姿を見ているのか。確かめる勇気はなかった。その間も獣の亀頭冠は膨らんだかと思うと暴れだし、唇を外れて頬へと悪液を擦り寄せてくる。

「エロい唇だな。ぐひゃひゃ、舐めながら擦れよ、ゴシゴシなっ。その手でな。ゴシゴシとなッ」

「何度も言うなっ！ 言わなくても……分かる」

卑猥な擬音を連呼されて、頬がほんのり紅くなる。

洗は舌先で掬ったばかりの液で唇をぎとつかせ、ねちちやつく唾液で口をもごつかせた。

（早くイッて！ イきなさいッ！）

口はすっかり先走りでねちよねちよになっている。

飲もうとすると、喉で引っ掛かって、気持ち悪さが余計広がった。掌で上下に擦るごとに、ぷちゅ、にちい、と液膜のすりつぶされる音が熱気と一緒に伝わる。

「ウオオオオ!! そうだあ! 速く擦れよお!」

獣人が激しく叫ぶ。気付かないうちに獣の生殖器は一回りその大きさを増し、なおかつドクドクと血管を走る血流量が増えていた。

馴れない手つきながら華奢な手が肉柱を上下すれば中で何かの生物が生まれ、藻掻くような異様な接触が伝わってきた。肉物との一体感がひと際強まる。接着剤で接合されたかのように自分の手が離れないことに、眼を白黒させてしまう。

(すっごい。さつきより、ずっとビクビクして……なんか、別の生き物みたい……)

戸惑いながら、不快に思いながらも、洗の脈の加速は止まらない。

(頂上の裂け目もぱくぱく……口みたい、香りも、ど

んどん強く……なってきた……る)

そして一秒ごとに様々な顔を見せるこの肉棒から、眼が離せなくなっていた。

(私……無理矢理やらされてるのに、心臓すぐく、ドキドキしてる……)

舐めれば舐めるほど濃い毒霧のように噴き出す精臭。匂いに当てられたのか、全身の体温が上昇し続ける。

そんな異変の疼きを必死に理性で抑えながら、頭を垂らし、カウパアの源泉を搾り取るように激しく舌を動かした。最初よりはずっとスムーズで、より多くの先走りを舌で搦め捕って喉奥に送ることができるようになっていた。

「じゅ、ぐむっズズズズズ……! あむ、ひゃっいえ、あむう、ぐうンン……」

知らず、吸引する力が強くなってくる。最初のころの漫然とした動きからは、確実に変化していた。まるで積極的に相手の反応を楽しむような自分の舌の動き



の馴れ具合に、洗は驚かすにはいられない。洗の舌がなじるようにしつこく絡めば絡むほど、ハティの肉王冠は大きく震えて、暴れの尖頭が上顎の凹凸面を滑る。口腔で生まれた疼きが少女の舌へ、活発な動きを促す。

「あん!? ぐううっ、うううううん……」

特命警士はくすぐったさに身をくねらせ、甘え声を出してしまふ。その間も洗の戦士の手は悪の幹部を擦り続け、その両の手は先端部から肉柱を伝ってくる絶頂液のような多量の汚濁のドロ液でコーティングされていく。

(何なのこの液……絡みついてきて、気持ち悪い)

不愉快という感情しか生まれぬ。だがなぜなのか、肉茎から伝わる熱さが、手を始点にふわりと広がってくる。こんな時に思いつくべきでない、絶頂寸前までいった昨夜の自慰行為が頭の片隅で浮かぶ。ざわつ、と膣壁が蠢く感触が股の奥で花開く。

(どうして今こんなことを。何を、考えているのよ、私はっ)

手に絡めた自分の愛液の透明度と、今自分の手を包み込む熱味の透明液が重なる。閉じていた少女の秘奥、それまで乾ききっていたはずの部位が段々と、液体に触れ始める。不快な湿りの面積が、ボディースーツの三角布に気味悪く広がっていく。冷たさが内股を辿る。(私の身体どうして。こんなことに……いいえ! そんなはずっ、そんなことない)

だが排尿感にも似た愛液分泌に、脊髄反射で腿が閉じられる。しかし余計奥から快楽の潮を絞り出す結果になり、軽し草のボディースーツの裏へと液溜まりをつくってしまう。股を緩めれば愛液が床に垂れるかも知れない、その緊張感が洗を液体が走る感触に対して、より敏感にさせる。

(集中するのよ、洗。早くイかせて、終わらせるのよ) 自分の小さな失態を忘れたという一心で洗は口を

動かし、手を動かして、目の前の肉柱を抜き続ける。

ついさっきまでフェラを知らなかったとは思えないほどの激しい扱きだ。顎を伝う唾液に、先走りが混じるのも気にせず、根本から頂へと舌の上下運動を行う。

「グッウツウオオオオ!! 出ちまうッ。この俺が、こんな早く、放つなんてエエエ!」

「あつつ、む! うう、ぐググ……!」

頭にかかってきた強い負荷。それまで舌尖端で攻めていた洗は、無理矢理口でそれを頬張らされてしまった。その上、いきなりの引き込みにグングンと、野太い肉が喉奥を激しく突き上げてくる。ザワリザワリと口腔中が震え、喉笛が戦慄く。

口の許容範囲を明らかに超えた男根を締め出そうと舌を暴れさせると、一層粘液まみれにされた肉銃が発情して、生臭さを発して洗は何度もええずいた。

ドクリドクリ……。男根の中で何千匹もの生物が蠢き、煮立っているかのような肉片の振動が手に張りつ

いてくる。それまでの高鳴りとは違う、明らかに切羽詰まったような噴き上げが皮膚を通して伝わり――。

「ウオオオオ、出るぞ。俺の精子、たっぷりを受け取れよオオオオオッ!」

ハティは上体を反らせ、盛大に声を震わせた。それまで洗の口の中に入り込んできた先走りとは全く異なる、弾力さえ伴った濃縮液が洗の舌へと触れたと思うと。

ジュビユウウウウウ……! どびゅつ! びゅつ! ビュッ! ビッ、ビッッ!!

「ふああ、むうう、んぐーッ!」

亀頭が喉奥でその横幅をまた拡大すると、激しい白濁の嘶きが咽頭部を激しく削り、無防備すぎる食道へドッと流れ込む。口いっぱいに苦さが広がる。菌茎まで塗り固めるほどの粘質と、片栗粉を頬張ったように水分がたちまち干上がっていく異質の液触り。

「ぶごつ、こおへえ、ア、ヒインンン……ンア。んっ

んっぐぐっつ」

「有無を言わせぬ強制嘔下^{えんか}。濃液の暴流に手も足も出ず、むせ返ってもむせ返っても押し寄せてくる。これまでの臭いが全く勝負にならないぐらいの苦臭の塊が臓腑を刺激した。喉がひくつく。精液が胃に溜まって、胃液と混ざるのが克明に分かってしまう。胃が騒ぐ。腹が痛い。しかし抜き出すことは叶わない。ハティの馬鹿力が少女の頭を押さえて離さないからだ。鼻が鳴り、今にも押し潰されそうな声を出すだけで、髪が虚しげに揺れる。

「おわ……はごっ、ンンンンノノノ……!!」

そのままの押し込みで洗の口は根本まで男根を飲み込み、まるで喉に管を押し込まれたように食道までを深々と淫根が突き通る。牡の吐き出す迸りは中断することなく、直接胃袋に発散し続けてくる。

「ぐ、ぐる……うう、うんっ！ うつぶ、……うンン、っつぱあっ!!」

女戦士はようやく解放されたものの、口中に染みついてしまった精液臭さはとれず、腹は精液に満たされてしまった。青ざめた洗はそのまま口を覆う。身体は当の昔に限界を超えていたのだ。そしてさっきまで咽頭部を占領された身体は、不要物を除外する手段を失っていた。しかし今は何の障害もない。

「!? ?! りゅうっ！ れえ、ハアアアアッ!!」

少女はあつという間に吐き出した。喉を削るムズムズした感触が、次々と押し寄せる。何度も何度もなま暖かいモノが、身体の中を濡れ濡れに引っかき回すだけ引っかいてどんどんと体外に出ていく。さらにまだ出し足りないのか、ハティのペニスは欲求液を噴き出して、少女のバイザーの上に降りかける。

（いやあああ、止まってえっ！ も、もう止まってえええッ！ ライネが見てるのに、私の身体あ、精液臭さくなるうう……）

目の前が白く塗られ、汚されている実感が涙腺を刺

激する。涙が込み上げてきそうになった。胃をせり上がり無理矢理食道を押し開いて、美少女の口からは逆流してきた白濁の液がいつ果てることなく出続ける。みるみるうちに洗の周囲が臭い、粘精で満ちていく。

「ああ……ひいっ、ぐ……うう。う、うううっ。こ、これで……満足かっ」

両膝をついた状態で、喉を引きつらせながら洗は口元を拭って片眼を細める。頭の中がぐるぐる掻き回されたように、気分が悪い。洗はこれに似た気分を味わったことがあった。初めての自慰で迎えたアクメの直後だ。全身が痙攣を起こしたかのように痺れて動かなくなつて、ベッドのシーツが汚れても何も構わないと投げやりになった。気持ち悪さと虚脱感が同居し、じんわり秘裂の肉奥で花咲く温もり……。

（いいつちやった……んじやないのに、こんな気持ちになるなんて……）

少なくとも絶頂近くまで気分が押しやられたのは確

かだ。精液を飲まされ、苦しめられたというのに。確かに身体の火照りは、自慰アクメの時とそう変わらな。密閉のバトルスーツの中の肉を、ツーツと滑り降りていく汗粒の流れがくすぐったい。

「先輩……！ 先輩！ だ、大丈夫ですかっ」
黒服たちの腕の中で、ライネが叫ぶ。

「ライネえ……だ、大丈夫……うっ、つぶ……よ。こ、これぐらい、全然これまでの戦いに比べれば全然ヘーキよ、ヘーキっ」

洗は激しい呼吸を繰り返しながらも、まだ腫にはしつかりとした意識の火を灯して答えた。しかし一度点けられた性欲の火はチリチリと、戦士の滾る力をエネルギーに燃え続けている。その証拠に息はかなり荒い。身体の隅々まで汚された感触に、身体が痙攣する。

（ううう。うああ。また……垂れてきてる）

必死に腹部に力を入れるが、すでに分泌されたものの流れを堰き止めることはできない。陰唇をなぞるよ

うに滑りが糸を引く。ぶるると、寒気が背筋を駆け上がる。だがそれとは対照的に下腹部は今までにないぐらゐの熱を持っていた。

「さすがは正義の戦士だぜッ。だがよ、いつまでも人の精子に浸ってるんじゃないよッ」

ハティは豪腕を伸ばして、すっきり精液に浸ってしまったポニーテールをひつつかみ、洗の身体を無理矢理に引つ張り上げた。ぐじより、と精液の染みついたスカートが重く、少女の大腿部にへばりつく。

「痛ああ……！ うううう、は、放せえっ！」

髪の毛が全部^{むし}さらられてしまいそうな乱暴さに、少女は力なく反抗する。だが髪を捕まれ、浮き上がった身体をどれだけ振り回しても何の効果もない。

「何だ。お前。感じてたのか」

「馬鹿なこと言わないで……！」

「息を荒げちまって。バイザーにや、俺の精液まで貼っつけてよ」

鋭角的なバイザーは、その先端からぼとりぼとりと、汁液が雨だれのように滴る。だがすぐに精液は色つきバイザーの表面から落ちていく。そして白雲から覗く日輪のような双眸は、爛々としていた。

「触るなっ！」

伸びてきた獣の乱暴な手を打ち払う。憎き奉仕を迫られた獣に、何度も馴れ馴れしく触られるのは我慢できない。ハティは驚いたようだが、すぐに残忍な笑みで顔を埋めた。

「そんなのどうでもいいだろうが。どうせ、てめえはこれからイキ続けて壊れるだけなんだから」

ハティはいやらしい目つきでぶら下がっている少女の身体、小振りな二つの胸を眺める。ボディースーツの裂け目から剥き出たポッチが、小刻みに震える。洗は分かりやすいほどの視線を受けながら、反抗することとはなかった。身体を揺することによって充血している乳首を頂く双乳を強調することになり、ボディース

ーツごしの美肉さえも肉感的なたわわさをアピールするだけで、今はただ相手を喜ばせるだけだ。

「身体は正直だな。上がこのザマなら……股間は、もうビショビショじゃないのかあッ！」

少女の両股はびっちりりと閉じられ、手までもがわざわざプリーツスカートの前面を押さえつけるようになっていた。痴態を見抜かれたような気がして、少女の顔はみるみる赤くなる。今まで敵に負けまいと、覚悟していた顔も俯きがちにならざるを得ない。

（ああ……まずい、このままじゃ、見つかつちゃう……濡れてるの、知られる……）

このままでは身体の正直な反応が見られてしまう。

なのにもできない……。

「それじゃあお披露目のお時間だ。お前の股と手が、一体何を隠してるのかなッ」

ハティの手がプリーツスカートの裾を掴む。必死に抗う洗の手を退かせ、そのままスカートを上へとずり

上げた。

「さあ、チェックしてやるゼッ！」

「や、や……めっなさいつ、ああああ……！」

左手はじゃじゃ馬戦士を宙に浮かせる為に髪を掴み、右手は少女の可憐所に垂れるスカートを持つて手はふさがっているはずだった。だがハティには第三の手ともいべき存在——シウルシウルシウル……と中空を這う味覚器官を使用する。それが洗の股間、スカートの中にひた隠しにされていた鋭角の終着地点へと伸びていく。

「ああ、き……た……なあああいい！　そ、そんな所ッ！」

光に晒されて輝く褐色の肌。蛇のような舌ペロリと一舐めの付け根、Vの字ラインの接合面を、ペロリと一舐めする。股奥に甘い蜜香がふわっと広がった。秘唇に虫でも集まったようなくすぐったさが、腰に響く。今にも縛めVラインから恥丘が引つ張り出されるのではないかという吸引力が生じ、少女の股間部を前に引つ

張り出す。

「くっう……あう……ああ、吸いつうくああ！ やめろお！ ……あッ。ふうううん……」

必死に己の理性を体中に巡らし、唇を噛みしめ、痴態だけは見せまいと意地になる。しかしいくら抵抗を見せても、人間には到底真似のできない（ウラノス）の誇る獣人兵器の舌技を前にしては、強情の皮はひんむかれ、奥に収まっていた芯が露出する。堪らず緩やかな嬌声を上げた。小陰唇が勝手に引きずられる強引さに、カクンカクンと腰が波打つ。

「……も、もう……これで終わりの訳。全然……感じなかつたわ……！」

頬を真っ赤に上気させ息も絶え絶えながら、強情を張る。しかしその肉体は舌の接近を知るとかすかに引き気味になり、くねくねと空中で艶かしい踊りを披露してしまふ。すでに髪を捕まれている、ということに對する痛みは薄らぎ始めていた。

「ぐへへ。強気じゃないか。なら、ちよつと激しくするか」

（ま、まだこれ以上……激しく……っ!）

今や獣の一言一句が洗の動揺に繋がる。ハティの蛇舌は一直線、Vの字ラインの集約点へ、これまでにないほど大量の唾液を舌粘膜から分泌させて、貼りついた。

ピチュと、愛液が奥で飛び跳ねる。それは丁度カメレオンが餌の蠅を捕らえたが如く、激しく元に戻ろうとする引力を發揮した。褐色の肌がザワツと粟立つた。「吸われるう。ひ、ああ、吸うなああああつ！」

恥骨が巻き込まれ、身体の奥が食べられるような初めて味わう快感に、洗は堪らず艶かしい声を上げてしまふ。ぎゅぎゅぎゅつと、そこは恥裂の少し上、少女の宝珠のある肉所。その筋肉が根こそぎもがれてしまふのではないかと思うほどに吸われる。新鮮な快美の痺れが腰椎から広がる。敏感豆もその力の前ではあ

まりに無力だった。

(ふうあ!? あわわわ……熱い! 何なの、この熱さは!)

舌が離れたと同時に。痺れに混ざる、連続する小規模発火。そして下半身が緩み、いとも簡単にバトルスーツごしで、皮質からまろび出た裸肉豆。裏地と擦れて、官能の波紋が体中に響き渡った。しかし燃えるような肉体を冷却しようとする汗は、ボディースーツにどんなんと吸収され、肉芽に食いつくように密着度を高めた。

その上ハティの醴液れいえきは、特殊素材によって編まれた衣服を易々と透過し、神経集合体の陰核へ、火に油を注ぐように絶え間なく降り注ぐ。逃げ場を失った淫核は次々と洗の初な肉体に、情け容赦ないシッペを繰り返し、洗を悶えの渦に漬け込む。

「はああああ、いやあ擦れて熱う……ッ!!」

「段々と正直になってきたなあ。それに今俺の舌は感

じたぞ。お前の股間部の固さをなあ」

ハティは急にポニーテールから手を離すと、再び少女戦士を白濁の液溜まりの中へ落とした。

「何を下らないこと……ううつ。はあ、はあ……下らないことをッ」

急な体重落下の為に素肌とボディースーツとが圧接し、剥き身の肉真珠が激しくすり潰される。もげてしまふかと思うほどの強い摩擦に、洗は目の前に小さな星の瞬きを見た。赤みを帯びた美髪みかみが白く斑まだらに穢れ、褐色の肌が白くペイントされていく。

ハティを目の前に、自分があまりに矮小に思えた。戦闘をする為につけているはずのバトルスーツが今や洗の敏感な所を総出で刺激していて、必要以上に過敏になっているとはいえ、快楽に僅かな間でも浸ってしまった自分の弱さが情けない。

(全部、こんな奴に見られるなんて……っ!!)

意識しなくても僅かな呼吸で胸が上下してしまい、

ずりずりと痒さが胸を締めつけてくる。チリチリと弱火で炙るような、細かな刺激が絶えず身体を包む。少しでも動けば、身体は一層快感の深みにはまりかねない。少女は敵の前で腹部を晒して、さも犬の服従ポーズのまま動けなくなってしまうた。

「感じやすい身体は罪深いぜエツ、なあ。ジャスティスフォーエバー！」

敵の言葉に反論もできない。敵の言葉は全体的を射てしまっているのだ。

「貴様のような変態には本格的によがるような、お仕置が必要だ」

ビクリと大きく洗の身体が跳ね上がる。今敏感な箇所をあの長い舌で舐め回され、吸引されたらどうなってしまうのか。もし勃起乳首を、お豆を舐め上げられたら……。頭の中で自分の喘ぎ声が響くような気がした。

（だめだ、洗。そんなこと考えるなっ、考えたら……）

ああっ、またあ……）

勃起の乳首から送られてくるジンジンする痺れの信号は、段々と心臓の鼓動のように感覚が短くなり、瞬間的に乳肉を巡る。内股になる。プチュ、と奥で愛液同士がひつつく。

内と外、それぞれの脅威に曝される女戦士は、顔を引きつらせることしかできない。自分の身体がこんなに淫靡に変化することが、今実際見ている中でも信じられない。ハティは少女警士を起こすと、さっと後ろに回り込んだ。そして少女の天使の羽を象った肩当てをむんずと捕らえると負荷を与え、洗の腰辺りに尻尾を絡ませた。

「やめろ！ ああ、い、あ、刺さる……うううっ」

獣の毛先が容赦なく洗の背筋をくすぐるように刺さって、むずむずした。両胸をブルンツと揺らし、下腹部からの鋭い刺激から逃げるように腰を浮かせる。しかし逃がしはしない、とハティが身体を密着させて、

啞然と見ているライネと向かいあうように座らされる。

「やめ、離せ、あうつつ……離せ……！」

ハティの豪腕によって両股をM字に開かれ、勃起肉豆の潜む秘園を披露する扇情的ポーズを強いられる。キリキリと恥骨が痛む。無理矢理なストレッチに、股の付け根が熱を帯びる。キツいはずの身体は、しかしその痛みさえ快感として洗の身体は吸収しようとする。

「くわああ……ふうあああ」

少女が抵抗を示せば示すだけハティの尾の巻きつき力が強くなり、消化器官内に残っていた精液の残臭が鼻の所にまで押し上げられた。生臭さに目眩めまいに襲われる。

「見せてやれ。貴様の浅ましい身体をつ！ぐひひひ。こんな乳首を大きくしやがって。いっつも身体が疼いて疼いてしようがないのだろうッ。いつも弄って、大きくしてやがる」

「あうう……そんなことないえ、ああつつ……ひ……」

ふううあう……！」

獣の挑発する言葉、自分でも嫌なほど分かる敏感な反応——家のベッドで四つんばいになりながら自分の身体から滲むエッチな臭いに興奮し、汗まみれになって体中を弄ってしまふしだらな自分の姿が、頭の中で何度も何度もフラッシュバックしていく。秘部が自慰回想にやんわり疼き始めた。吐息は発情の熱を帯び、ふるふると震えた。

「先輩はそんなことしているはず……ない、そうですよね。強い先輩の心が、あなたたちに、あなたたちなんか、引きずられるはずがないっ。……」

（ライネ、私のことを、信じてくれてる……そうだ……、こんな奴、に負け……られない）

力を絞って顔を上げる。大丈夫、それを伝える為にライネへにつこりと笑って見せた。

「かわいそうに。非力な上司を持つ部下は苦勞するなア、ぐひやひやひや！」

「ヘウラノス」の技術と私の才能を以てすれば、こんなことは簡単なんですよ」

ライネは何ら悪びれた様子もなく語る。麗乃のこめかみに青筋が浮かぶ。

「主任。怒っているんですね、ご自分を。……もし、主任がジャスティスフォースを辞めなければ、洗先輩がこんなことにならなくてもよかったです、と」

彼女には珍しくほとんど衝動的に、三十八口径レボルバーを突きつけた。

「見せてあげたかったですよ。先輩が汚らしい男共に奉仕して、犯される所……」

麗乃は洗を自分のもとで教育し、決して上層部の言いなりになる戦闘人形にならないように指導に力を入れた。だが少女は裏切られてしまった。それも信頼し、慈しんでいたはずの後輩の少女に――。

「洗を元に戻せッ、早くッ！」

「本当に洗先輩のことが大好きなんです」

花のように美しく澄んだ金髪が宙に踊り、こめかみのすぐ側に激しい空気を感じた。麗乃が両手に構えたレボルバーのうち、一つの銃口から薄煙が伸び上がった。

「次は本気だ。本気でお前の頭をぶち抜く……さあ、早く洗の身体を元に戻すんだッ」

「ふふふ。だーかーらー、先輩は本当に孕んでい――」

ダアンソッ！

ライネは顔を歪め、氷のように冷たく刃物のように鋭い麗乃の顔を見た。次にレボルバーに持つていかれた右腕を省みる。見事に肩から下がらない。そしてもう一度目の前の無表情の戦士を見る。悪魔の女幹部の顔が初めて恐怖に引きつった。

「ほ、……本当に撃つなんて。あ、ああ……あ。思い出しました！先輩を助ける方法――」

脚を折り、敵に媚びるような笑みを浮かべる。その声は震え、焦りにまみれていた。

「もう、いいわっ」

ダン、ダンッ！ 二発の銃声が鎮魂歌のビートを刻む。うち一発は、ライネの心臓部を一分のズレもなく撃ち抜いた。グヴァッ、と凄まじく飛び散る鮮血。少女の小柄な身体が大きく仰け反る。そしてそのまま動かなくなり、腕がだらりと力なく垂れた。黒服たちを一瞥。しかし彼らは自分たちのボスが斃たおれたというのに、少しも動じた様子がない。

レボルバーの衝撃収まらぬ中。麗乃は敵の亡骸や、下っ端などには目もくれず、気を失っている後輩に駆け寄る。今の少女にとっては何も考えず、気絶している方が幸せだろう。

「洗。ごめんなさい……っ」

悔しいが、ライネの言うことは的を射ていた。今さらながら、麗乃は自らの思慮の浅さを痛感していた。

自分が辞めれば、警士局上層部は他の人間を代わりに使うのは予想できていた事態だった。血潮を浴び、

火薬の臭いにまみれ、それによって自分の幸せを犠牲にしながら生きる人間を増やすことになることも。

「ごめんっ！」

ジャスティスフォースはおもむろに立ち上がる。早くこの薄暗い地下牢のような場所——製薬会社の廃工場の真下につくられた異世界——から出る為、銃口を洗の手を拘束する鎖へと向けた。

「ダメ……ダメ……すよ。外……そう……とし……ちゃ」
不意に背後から声がかかった。妙に、カクカクとした言葉だ。

「えっ……!？」

銃口を再び向けたその先に、今右腕を吹き飛ばし心臓を撃ち抜いたはずの少女が平然と立っていた。確かに撃ち倒したはずの相手の復活に、麗乃は厚めの唇を震えさせた。

「………ダメですよ。そんなことしちゃ……主任」

ライネの肉体を形成する筋肉繊維がじゅりじゅりと、時間が巻き戻されているかのようによ修復され、元のよ
うに結合していく。血は一滴も噴き出ることはない。

剥き出しの筋肉組織は新しい皮膚によって包まれ、
美しい柔肌が構築されていく。

「無駄なことを。私はそんなことでは死にませんよ。
でも、少し痛みは感じちゃいました。だから、お返し
です……うふっふっふっふ」

ライネは腕を伸ばし合図を出す。すると、天井から
シウルシウルと何かが蠢く音。麗乃はライトに眼を細
めながら天井を窺うと、幾本もの太い配線やら管やら
が密集し、それが今、一本の河の流れのように動いて
いるのだ。その触手の流れの一画、銀色の極太配線の
うちの一本が蚯蚓のようにくねりながら、下りてきた。
そして突然麗乃めがけ、プシューウウと煙を吐き出し
た——咄嗟に、レボルバーのトリガーを引いたのと同
時。

「かはっ！ うえ、げぼげぼっ……！」

狙い通りに弾丸は銀筒を撃ち抜いた。しかし緑色の
煙を麗乃は吸い込んでしまう。

「うふっ、おっほっ！ はう……あつくーうっ」

するりと、麗乃の手から愛用のレボルバーが滑り落
ちる。襲ってきたのは、全身の筋肉から緊張という言
葉が消えてしまったかのようなひどい虚脱感。気が付
くと直立から正座の形に座り込んでいた。息は荒くな
るばかりで、身体の表皮を滑るように悪寒が走る。だ
が正反対に身体の中は燃えるように熱い。白い滑らか
な曲線を描く顎を持ち上げ、身体を振る。食いしばっ
た口から漏れる息は、深い熱を帯びていた。

「どう先輩。特製の濃厚な催淫ガスのお味は？」

「さい、淫……ガスう!? はうう——っ！」

体勢を崩す麗乃。そんな彼女のもとへ、空を切り裂
いて長い触手が接近。そのまま長身瘦躯の女主任の両
腕は搦め捕られ、勢いよく壁際へと押しつけられてし

まう。激しい衝撃にハイポリウム胸果実がぶるぶると上下左右、いっぱい揺らめく。

「ががあっ……！ くっそおッ、ライネえ、貴様っ」

両腕を押さえられ、脚を投げ出す格好で拘束される。

だがいくら旺盛な闘争心があっても動けなければしようがない。麗乃は苦々しく不死身少女の微笑を見ろしかなかった。

「ど、どうして。私……こんな、どうして身体！ あ、

ああ……そんな……」

目を覚ました洗は絶叫した。ジャスティスフォースⅡのアイデンティティーとしてのバトルスーツが無惨な様相を呈し、黒いボディースーツに包まれた腹が、ぼつてりと膨らんでいるのだ。

「先輩忘れたんですか。赤ちゃんを孕んだこと。もう臨月、でしょうね。もう少しですよ」

強制排卵剤を注射され、孕みの準備が整った身体へ

の大量の精液の噴射。あの時の忌まわしい記憶が甦ってくる。

「お願い、言わないでえ！ お願い。でも、そんな。何で……どうしてこんな早く……」

たとえ受精に成功しても、ここまでするにはかなりの時間が必要なのが普通だ。

「私の開発した特殊精子のお陰です。先輩の発情によって自分自身で成長ホルモンを発する優秀な奴で、母胎の感じる興奮に反応して、通常の数十倍のホルモンを放出するんです」

母胎の覚える極度の興奮。洗は気絶させられるほどの絶頂を味わったことを思い出す。

「でも予想以上でしたよ。いくら成長が早いといっても、まさかあれから数時間で。いっぱい犯した甲斐がありました。先輩すつごいい声で啼いてくれたんですよのね」

洗はあまりに驚愕的な事実にも出せない。今の状

態が、自分の淫らさが誘引した事態だということが信じられないのだ。

「もう一つ予想外なことは。主任がきてしまったことですけど、先輩……気付きました？」

自分の身へと降りかかったことに、それまで周りが見えていなかった。真向かいに麗乃の姿。全身が壁に押しつけられ、持ち上げられた両手首を触手によって拘束され、両脚は無気力に投げ出されていた。その格好はいつもとは明らかに違い、どことなく自分——ジャスティスフォースⅡを思わせる。洗はその姿に見覚えがあるようだが、思い出せない。

(あ、あれ……?)

一刹那。気のせいかも知れないが、麗乃の姿が幼いころの記憶の中にある、あの女性とだぶった。だがその直後から、今の自分の姿を麗乃に見られることに對してひどい抵抗を覚えた。それは肉体の中でも常識の域を超えて隆起する美肉を見られての羞恥は当然なが

らも、心の奥——温かな思い出までも踏みにはじられるような苦しみ。

「いやアアアア! ……見ないでください、主任。私のお、私のこんな姿見ないで……」

気持ちよくなつてはいけない。しかし薬品の効果で多量の女性ホルモンが分泌されている洗の身体は、今では健康的な褐色の胸は不自然なほどに膨れ、体中の神経という神経が鋭敏に研ぎ澄まされてしまっている。今にも弾けそうな鳳仙花のような乳果を土台にして、そそり立つ乳嘴は立派に成長していた。憧れの先輩にエッチな身体が知られてしまう。少女の繊細な心は、粗悪なガラスのようにどんどんとひび割れていく。

「見てもらいますようによ。先輩の目も当てられないほどエッチな姿をねっ!」

グリッ、と突然ライネの手に、洗の胸が鷲掴まれる。鋭い打撃感と、肌が燃えるような燃焼感が、カァッ! と神経を衝いてきた。

「うんんっああ、主任がひうのにい！」

最初は胎内が押し出されるような鈍痛を伴っていたが、揉み込みが激しくされるうち喉の奥から色っぽい声が零れ出す。尖頭だけでなく、その周辺の部位にまで血液が集まって紅潮する。さらに黒服たちの残酷でいやらしい目つきが、神経と縛れあう。

「先輩の胸、どんどん痲つてきてますよ。乳腺なんか、もう触れば掴めちゃう……」

「ああふう……やめえ、そ、それいひよう、やつはっらあ、で、出ひやううう!!」

揉み込みが一層力のこもったものになっていく。乳の下半球部分、ライネの言った通り胸に何かを埋め込まれたかのように、コリコリとしていた。その違和感が、美しい媚乳のラインに同化していく。そこを掴まれると、臍の孔を穿られるような感覚が全身を包み、下腹がキュンと甘く切なくなってしまうのだ。

（うううう……む、胸触られてどんどんエッチな気持

ちになってくるなんて……!!）

乳蕾が蕩かされていく刺激にまみれ、敏感な興奮胸突起への血行がさらによくなり、薔薇を思わせる深紅に染まっていく。それが恐怖への第一歩であることに気付かされても、力の出せない少女は、淫らに変わってしまった自分の身体を押しとどめる術を知らない。

「くる、きい……胸、胸え、弾けちゃう、アアアアッ、出ふうううううううッ！」

大胸筋を振動させ、まるで放尿の瞬間の時のような、吹き上げが伝わったと思うと。

ビュ！ ビュブッピャアアアアアア!!

胸突起がひと際大きく盛り上がり、乳孔が内側からこじ開けられる。泡が割れる音と一緒に、二条の乳白色が弾けて飛び出した。乳首がもげてしまいそうなその勢いに引かずられ、そのまま前方に吹き飛ぶような感覚に洗の肉体はいたぶられる。それほど乳の噴射は

少女の意識を掻き乱すのに十分な官能美を秘めていたのだ。

「おっぱいいいっつい、出りゆううつううううッ、
イ、イクウウウ！ おっぱい漏らしながらイッ、キャ
ヒュユユッ——!?」

第一射の激しさはなかなか衰えることなく、全身の水分が次々と乳濁に転換されてるように、ズボボボボと洗の胸を振り回して噴射は続く。二つの禍々しい巨乳がブルリッと瑞々しく揺れ、絶頂を迎えた後の腔肉のように、あらゆる刺激に反応する。

汗に浸かった前髪を額にくつつけながら、口を全開にした。ひいひい……と胸が蕩けるほどの熱量が乳首先端から全身へと、依然として鞭を打ってくる。

（止まってえええ、お願い。これ以上先輩の前で、おっぱい漏らしたくな……きいひッ!）

さらに沸騰した愉悦が、胸の中で幾つも淫乱な輝きを見せて花火のように炸裂した。少女の精神を追いつ

めても弱まることを知らない白色噴射は、洗を二度三度と連続して快楽の熱情でその肉体を燃やし尽くす。

「あうううう！ やめへえ、止めてえ！ ひいあ……
くウウウッ!!」

ライネによって片胸が、引きちぎられんばかりの強さで直角に持ち上げられる。その間も、まるで蛇が乳山に巻きついて振り上げるような愛撫を受け、乳腺が絶えず刺激される。根本の辺りは痛いぐらいに癩る。

鋭い握力が肉に食い込み、グリユと何かが潰れ、九
十度近くにそそり立った乳首から、ビュブブ——
ッ！ と、盛大に母乳が噴き出した。乳首が燃え上がり
りそうなほどの高温を発して、凄まじい爽快感と興奮
が筋肉を吊り上げる。高く打ち上げられた乳飛沫は当
然勢いを途中で失い、落ちてくる。ピチャピチャッと、
肌に染み込む母乳。その温かく柔らかな感触は、かす
かに母親のことを思い出させた。母親に抱かれた時の
あの甘い匂い。少女は母親への回顧に欣快きんかいを覚えた。



ようやく乳雨が収まったころには、髪や褐色の肌は乳白で覆われてぐっしり濡れ、乳臭さに埋もれていた。甘い思い出に神経は一層高ぶり、不用意に快感を感じてしまう。その上、洗の性感が頂点に達するたびに、お腹の子が喜ぶように腹を蹴ってくるのだ。

「本当にエッチな身体になりましたね。こーんなに乳首大きくして、主任も軽蔑してますよ」

乳の滴はライネの腕も少し汚していた。しかし彼女は乳を舐めながら、機嫌がいい。

「まひやあ、あうんんふ触りゆなあ、あうあう、……あつうッ！」

指の腹で赤乳首の先端をぐりぐりと潰されると、残滓がピピユツとかわいらしく漏れた。脱力感が全身を圧する。何もかもが蕩けて消えて急に気が遠くなってきた。そんな時にもまるで洗の心を読んだかのような絶妙なタイミングで、再び痲り乳尖に指が絡められ、薄れかけていた意識を無理矢理に引き起こされてしま

う。

「!? お願いつ、休まへえて! これ以上はっ、麗乃主任、の前じゃあ、恥かし……あううっ!!」

乳首の先端の小さな孔に、指が付き込まれ、激しく穿り返された。ぐりぐりゆと胸の中に溜まっている母乳が掻き混ぜられるようで、乳腺が痛いほどにさらに硬く、膨れる。だが、ライネによる乳首への指栓の為にそれを放出することができず、もどかしい熱情が脹らむ。代わりに半透明の出来損ないの母乳のようなものが出てきた。

(う、全部出せない……胸、このままじゃ壊れちゃう。これ以上、膨れたら……私、私い)

大量乳射を一度経験した少女の胸は、それだけで満足はできなくなっていた。この程度の鈍い刺激では、極上の快楽を知った洗の神経体によって爪弾きにされてしまう。だがそんな刺激にも、乳腺はちゃんと反応して新たな乳を生産をする。発射を止められた母乳が、

（汚される……私の身体が、汚らしく……）

快楽に身を任せ始めたジャスティスフォースの皮膚への擦りつけの痛みや、内部の肉身にまで浸透していくむず痒さが、快感へ変わる。

「だ、だめ！　そこ、そこはっ。感じすぎるッ、んんくううう……っ！」

胸ポッチを挟まれ、激しく前後に揺さぶられると、乳頭が爆ぜて、一回りさらに勃起率が高まり、絶頂へ追い落とされる。汗や、愛液を吸いすぎて麗乃の尻にかぶりつく拘束具となつてしまったマイクロスカートは、男たちの愚かしいほどに乱雑な動きの巻き添えを食らつて白濁の染みに汚れ、今の麗乃の身心同様にぐちゃぐちゃになつてしまつてゐる。

自我を保つのが手一杯だというこの状況で、黒服の一人が、蜜汁を吐き出しまくつてゐる前門へ、肉棒を突き入れてきた。

「ッ！」

今まで散々焦らされた場所の充実に、麗乃は声にならない叫びを上げ、白目を剥いた。

「おら、エロ警士っ。どうだ！　俺のはっ、ええッ!!」
大きく背中を仰け反る麗乃。そのまま仰向けに倒され、赤い唇を歪めた。

「ふっ、太いいい！　お腹いっぱい、入つてえ、きへふう……うう！」

乱暴な突き入れが蜜壺を捏ね、膣部の鬣波が、野太い肉茎でゴシゴシと掘られ、灼かれる。女警士は喘鳴を漏らし、硬い亀頭の押し出しと共に胎内で本気汁が混ぜられる心地よさに、身体全体を揺すつて応えた。膣部の全域が子宮口のように敏感になり、逸物の往復だけで絶頂を駆け上がった。まう。

「あ、あああああー！　イッちゃ、ひいあああああ、あ……あ……洗アアッ——!!」

グジュビジャと、背筋を震えが駆け抜けた。腕をぐいと伸ばし、助けることのできないままの後輩の幻

を、絶頂で震える瞳が虚空に見る。欲求の充足による喜びが、気丈な女から、本能で燻る野性的な部分を蒸留し始めていた。

「あの小娘を助けられないのが、そんなに残念か。ぐへへ。だがな安心しろ、お前が身体を張れば、あいつは助かるかも知れんぞ。ぐっふっふっふ……」

絶頂の余韻ではつきりしない頭の中で、その声だけはつきり聞こえた。

「俺たちと、契約を結べばいいのさ。我らへウラノスとなつ」

そしていつしか、意識が薄れていった。

ジャステイスフォースⅡ。その姿は歪に膨れ上がり、中でも一際目立つ胸部を造形する肉肌には、染み込んだ乳液の痕跡が残っている。イブはそんな少女を正面から抱きしめ、乳首を口に含んで幸せそうに笑う。これだけ見れば、母親が赤ん坊に母乳をあげている微笑

ましい光景だが、洗は上体を起こして、両脚を投げ出したまま、痙攣するだけだった。

「あはうう、ふあうう……うううつく」

勇ましい少女の目を縁取ったバイザーごしの瞳は、愉悦に微睡まどろんでいた。バイザーは傷だらけで、カチカチと脆弱に揺れる。乳は散々搾られたせいも、それほども零れなくなってきたが、それでもイブは容赦なく、乳首に歯を立てて刺激してきた。

「れえあ！ そんな胸吸つたら、ひゃっ、ああーっ」

少しの刺激に対しても敏感な乳胸は、すぐに新たな母乳を醸造してしまう。

ゴリゴリ、プシュブシャ、ジュギユグググ……！

「止まらないいい！ ひいあ、吸うのっ!? あっつっひあッ!!」

盛大に噴き出た母乳。その瞬間だけは冷めていた身体や気分がカッカと熱情を帯びた。だが一度放出すると、憂鬱感がどつとのしかかってくる。出したくない

のに、必死に我慢しているのに、洗の身体は言うことを聞いてくれない。そんな母親の苦悶を知ってか知らずか、イブはおいしそうに、口を乳白色にまみれさせて嗤うのだ。

「ママの胸、さっきよりまた大きくなったんじゃない？ ううふふ、ホルスタインみたい」

ポデーリースーツの黒と、生地を取り除かれた部分——両胸と淫阜の褐色とが、コミカルな牛を思わせる。

膨張美乳の肌は青白い血管が透けて見えるほどに、張りつめていた。

それをイブが正面から抱きしめた。胸の先つぽが潰れて、キリキリと痛む。

「こ、これ以上はああ、おっぱい、も、もう許してええっ！」

しかし口に付着した母乳の滴を拭ったイブに、洗の言葉など聞く様子は無い。両方のぐにやぐにやのスライムのような乳房をかき集めると、両乳首をいっぺん

に口に含んだ。

ジュズツ、ズグ、ングツと卑猥な水音を立てて、淫乳をごくごくくと飲み干されていく。乳首の尖頭に開いた穴が舌で弄られ、乳房がズキユン、と大きく跳ねた。ずいずいと吸い上げられる母乳の流動に、絶え間ない白光を頭の中に感じさせられ続けてしまう。

「全部全部胸食べられていあああああ！ ンツツく！」

胸を頬張られ、何度も何度も歯を立てられる。痛覚が刺激され、胸が大きいたわむ。乳輪と肌の境目もべろべろと舐められる乳弄に、いつの間にか少女警士は虜になっていた。

唇は締めりを失い、乳が噴き出るたびに小刻みに涎が垂れる。

「ンツン、ママすっごく胸がいいのね。えへへ。もっと気持ちよくさせてあげるよお」

「ンくッ……ンンんうっ」

洗はイブの言葉に喜ぶかのように、猫が甘えるように喉をごろごろと鳴らすように甘える。どちらが子供が分からない。ライネは突然かなり強い力で、洗を押し倒し、馬なりになった。そして間髪入れることなく、肉塔を胸の間に埋め、洗の顔に亀頭を擦りつけてきた。鼻先を削られ、バイザーの表面にカリが押しつけられる。ディギディギディギヂ。それは特殊警棒の軋む音に似ていた。金属のくぐもった音が少女を不安にさせる。

「やめえ、壊れ、ひやあう。そんな大きいモノで、やつちゅあ、壊れゆうつ！」

普段触られることのほとんどない乳の内肉が、強張りて削られる。一度出産を味わい、瑞々しいばかりの張りと大ききの艶やかな胸肉が、ぐに、ぐにゆと肉棒の形に大きく歪み、左右から押し込む洗の指に沿って揉む。

(胸に、イブのおちんちん、吸いついちゃってる……)

指が触れあうだけで、敏感な胸は発火しそうなほどに熱を持ち、洗を苛む。

「やめっ……んッッ……あ、それい、以上、いいん……！」

唾液が喉に絡まって、声がよく出ない。——ギッチギッチ、バイザーが歪む。恐れの色に染まった瞳だけが、今は正義のヒロインの真実を映す。引きつる瞳孔。「ふあ！ おちんちん吸いついて。ああうう！ 出ちゃうよおおお……、ママあゝつ！」

間近に迫った性器の絶頂の躍動。亀頭が膨らみ、鈴口は小指が入りそうなほどに開く。ブリュリユリユリユリユリユツ!!

放出されたイブの精液。ベチヨッベチヨッと、バイザーにひっきりなしにかかり、ネットリと斜面を滑落する。だがバイザーから精液がなくなり視界が開けると、目にしたのはまだ隆々とそそり立つ肉塔だった。

(こ、こっただけ出したのに……まだ、あんなに……お、



おっきいのっ!?)

そのままイブは腰を引き、バイザーから剛直が遠ざかったと思うと。

「ンンッ!? くうッ、んッ……っ」

咽を突き上げてくる一切の手加減のない衝撃。打ち込まれた肉棒は油断して洗の唇を割ったのだ。苦しさが胸いっぱいになり、先走りのドロドロ感が口粘膜に付着すると、ゾクッと身悶えするほどの波紋が、喉元から頭の中に広がる。

「んふっ! んんっ! ぶうふ……んお!」

挟んでいる胸の内側が何度も擦られ、それだけで快楽神経に凶太い快感が突き刺さり、胸肉の痙攣の具合を強めた。洗は身体の奥に染み込んでくるような熱情に操られるように、自らの胸を抱えて極長棒を抜き始める。

「んふうっうっ…熱い…胸、とけひゃう……」

ひたすらに肉棒に向かって両乳を絞り、勃起乳首を

肉棒へ擦る。プチュプチュと乳首からは乳液が少量だが分泌された。洗は自らの胸を、自家搾乳することへ甘い魅力を神経に刷り込まれることを覚えるのだ。

「ママ。いいよ。すっごく気持ちいい! 絞られちゃう。イブのおちんちん絞られちゃう!」

イブは、腰を強く捻り、生みの親の咽喉を蹂躞する。岩石のように硬質で溶岩のような灼熱の亀頭が、口内の側面粘膜を次々と抉って掬う。

「もっほっ、ペースおとひいてえっ……くるひーううんごっ、ぐをっ……」

洗は必死に長大な逸物を吐き出そうとするが、少女らしからぬ強い力による、深い咽挿入を肉体に染みつけられてしまう。

「ああ! すっごいつ、ママあ、最高だよ。ママの口、うううっ!」

小柄な身体をビクリビクリと波打たせながら、快楽に溺れるイブ。

「あ、アアアッ、痺れるうう、痺れ……ああ、出るよ、ママ。せー液、せー液があああつ」

ジググビュッ、ビビビビブブブッ!! 今にもはち切れんばかりだった亀頭が蠢動し、一回りもその肉胴を増すと、薄皮ごしの極太血管がより色濃く浮き出て、凄まじい勢いで白辱を迸らせた。呼吸が難しくなるほど、放出後のその場の空気は陰惨な性臭で満ちる。

「ひいん。やあああああつ……!?!」

生臭さが口の中一杯に広がり、同時に迸る快感の流線が、口内神経と胸突起の神経を連結させ、浮遊感が身体の自由を奪う。だがイブの逸物は射精後も、その剛直ぶりは全く変わらぬ。むしろさつきよりも硬質さが増して、胸に張りついて離れない。それはまるで洗の肌が、イブの極太肉に恋をしてしまったようだ。

「ああ……ううん」

にゆるりと、巨乳の挟みから肉棒が抜ける。洗は物欲しそうな細かい声を出す。そんな洗の目の前に、ぬ

つと突き出された淡い肌の色の中に生まれた薔薇の花弁。深い谷間に橋が架かるように、ねちゃつく粘糸。

それはイブの牝の証だ。そのすぐ近くの陽根は今でもひくついていた。イブは洗の顔に思いつきり、牝陰部を擦りつけて、跨っていた。

「ママ。イブの女の子お、すつごくずぶ濡れになっちゃってんだよ。舐めてよ、ママ」

巨陽根はお預けだ、と舌の届かない所に持ち上げられてしまう。洗は頬を上気させて、目を熱っぽく潤ましたまま、差し出された娘の縦割れを舌で遊ぶ。

「え、ああっ。……んんぶっ」

口、目へと無理矢理に押しつけられた肉襞。肉裂に鼻骨と唇が、剥き出しの小陰唇に挟まれてしまう。誰の侵入も容れたことのないそこは、色素の沈殿もなく奇麗すぎるぐらいに澄んでいた。洗は膣肉を差し出されるがまま、舌を泳がせた。

(イブのえっちなおつゆ、熱くて、舌灼けそうよ)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！ <http://ktcom.jp/> 検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

Valkyrie

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!